

言語脳科学者・酒井邦嘉

東京大学教授が人類に警鐘！

AIが文明を滅ぼす

「もどき」にすぎず、何も「生成」しない

AIの濫用によって、人類の文明は衰退の危機に直面している——私はそう危惧しています。

文明とは、伝統を守りながら、新しいものを生み出していく営為です。その創造的な営みは人間の考える力、つまりは言語能力によって支えられてきました。しかし、「見かけ上の知能」でしかないAIに取って代わられれば、脳に負荷をかけることで育まれる「考える力」が人類から奪わ

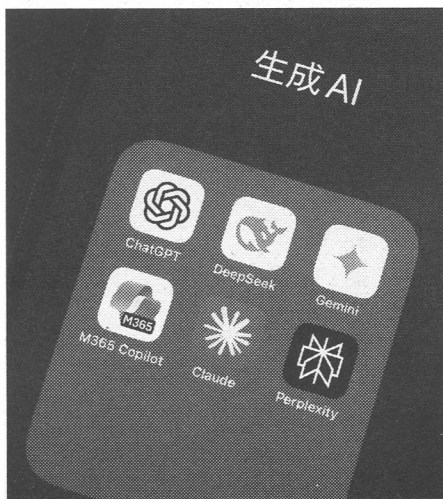
れてしまう。その結果、学問や芸術のオリジナルの価値が毀損されてしまい、人間の創造性が消えてしまうでしょう。

AIには、人間の脳の働きを再現することなどできません。いわば「もどき」ではない。それなのに「タイプ」（タイムパフォーマンス）重視のビジネス的な思考のせいで、人々が「AI依存症」に陥っているのが現状です。行き着く先は「一億総無脳化」とでも呼ぶべき時代でしょう

か。すでに私たちは、確実に後戻りできないところまできているのです。

酒井邦嘉・東京大学大学院総合文化研究科教授（60歳）はそう警鐘を鳴らす。日本を代表する言語脳科学者である酒井氏は、近著『デジタル脳クライシス』で、デジタル機器やAIを安易に使用することで「人間の脳が衰える」危険性を、最新科学の研究結果や脳の仕組みを示しながら指摘している。「創造的な脳」を守るために私たちができるこ

スマホに続々と搭載される「生成」AI



——とは——。

まず、「生成AI」という呼び方が誤解を生みやすいのです。私は「合成AI」と一貫して言い続けています。

AIが文明を滅ぼす

大型企画満載 次号は3月21日(金曜日) 発売です(一部地域は除く)

23年頃から、チャットGPTに代表される「合成AI」が「生成AI」として普及し始め、すぐに飛びついた人たちの肯定的な——かつ盲目的な意見が各メディアやSNSに溢れました。あまつさえ、本来は子供の脳を育てるのが仕事であるはずの、教育現場にもAIは積極的に導入され

AIによる「負のスパイラル」とは

もちろん、人間の芸術も模写や模倣によってその歩みを進めてきたことは確かです。フィンセント・ファン・ゴッホは、わかりやすい存在でしょう。画家のゴッホは日本の浮世絵を愛し、自ら模倣しています。ゴッホは浮世絵をトレースし、それを拡大することで、完璧な構図の複写を作り上げようとした。

しかし、その絵に彩色するにあたっては、ゴッホのオリジナルが發揮されまし

つつあります。

しかし、本当にAIは何かを「生成」、つまり生み出しているでしょうか。実際にやっていることは、既存の文章や画像などを組み合わせ、「合成」してそれらしく見せているにすぎません。「もどき」にすぎず、何も「生成」などしていません。

た。たとえば、版画である浮世絵にあった、ぼかしによる樹皮の表現が、油絵によって完全に立体的に描かれている、というように。元々あるものに新たなアイデアを加えてみる。まさにこれこそが人間の創造的な営みです。

その芸術性は、AIには決してありません。

絵画も、また音楽でも、芸術表現はまず「型」を真似ることで、作品や師から学ぶところからはじまります。ところ

が、インターネットの普及で世界中の演奏が手軽に聞けるようになったにもかかわらず、音楽教師からよく聞くのが、「最近、生徒が下手になっている」という不安です。

それはどういふことか。YouTubeなどの配信サービスの普及によって、プロの演奏が気軽に聞けるようになった一方、素人の演奏も溢れ、玉石混淆になってしまっている。「悪貨は良貨を駆逐する」

ではないですが、ウケ狙いの演奏ばかりがもてはやされ、審美眼を持っていない子供たちや初心者がそれをお手本にしてしまう。すると、真に芸術的なものに触れる機会がますます少なくなり、上達する機会が減ってしまうのです。

そんな酷い状態のところ

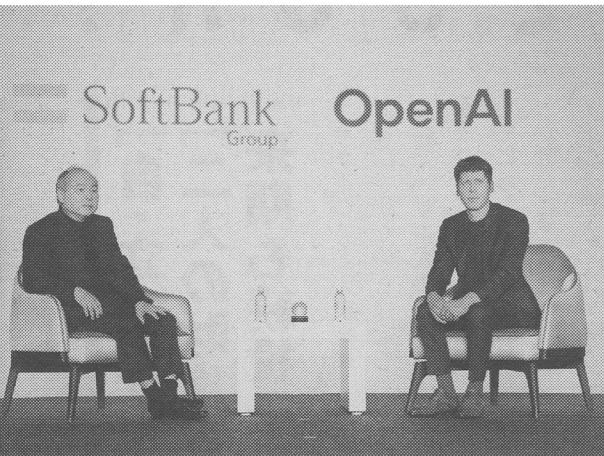
に、今度はAIが大量になだれ込んできた。音楽のみならず文章や絵も同じで、「もどき」を模倣することが繰り返され、それらしい作品が量産

されています。さらにそれをまたAIが模倣していく……。もはや「負のスパイラル」は止められなくなっています。

大手IT企業が、AIを率先して普及させようとしている今、人間の文明は息の根を止められつつあると言っても過言ではありません。事ここに至っては、AIを規制するほかない。しかし、ご存知のとおりビジネスや教育の現場にAIはどんどん侵食し、学術の世界でも人工知能学会は「一律な利用の禁止は何も生み出しません」と公言しています。学者の間で止める動きも、ほとんどありません。

昨年のノーベル物理学賞と化学賞を、ともにAI分野の研究者が受賞し、学問的にもお墨付きが与えられてしまったようにさえ見えます。

ビジネスにおいて、AIを効率化のために使用することはままあることでしょう。たとえば、株の運用などで



AI普及を推し進めるサム・アルトマン氏(右)と孫正義氏

しかし、すべての人がAIを使える以上、より強力なAIを求めて競争が起こるだけのこと、投機的な判断はもはや人知を超えています。

どこに投資をするかといった「価値判断」をAIに任せてしまえば、それは人間の知性を諦めてしまうことになりませんか。それでもなおAIに依存して、その先にあるはずの利潤を求めてやまないなら、AI同士の戦いに翻弄され、達成感が得られることは

ないでしょう。効率では測りきれない創造的価値や判断が、ビジネスの世界でも必要ではないでしょうか。

私の最大の不安は、教育の現場に安易にAIを導入して

「叩き台」に使用してはいけない理由

私は合成AIの登場以後、大学での試験を手書きでの筆記試験に変えました。それまでは手書きのレポートを提出させていましたが、合成AIが「レポートもどき」を簡単に作成してしまうので仕方ありません。授業でのAIの採用は教員に任されていますから、AIに頼らないためには「もどき」が可能なレポートによる採点ではなく、実際にペンを使う筆記試験を実施するしかないのです。

文部科学省は教員向けのガイドラインで、「文章の『叩き台』にAIを使用すること」を推奨しています。しかしな

しまったことです。AIに任せれば、教員も教育委員会も責任を取らなくて済む。業務を効率化できると言いますが、ではその分で別の何かを生み出しているのでしょうか。

から、「叩き台」を作ることこそ、人間に本来備わっている創造力が必要なのです。いちばん難しいけれど、もっとも創造的な営みなのです。

私からすれば、文章の叩き台として一字たりともAIに頼りたくはありません。文章を書くには、思考を整理し脳に負荷をかけ続けること、時間をかけることが重要です。学芸の仕事では、その労苦の過程こそが人生を豊かにします。

まずは、思考力を育てる幼少期の教育の現場で、ペンと紙を持つところから創造性を取り戻す試みをしてほしい。新しいビジネスの探求にも、

創造性が不可欠だと思えますが、創造性は能動的な好奇心から生まれます。これを育むには、やはり読書が肝要です。著者の意図や心情を想像し、自らの思索に耽ること、考える力が身につきます。

小説やエッセイ、専門書、そして事実関係の裏取り取材がなされた新聞や雑誌の記事などには、常に触れ続けるべきでしょう。

しかし、現実には弊害があまりに多いにもかかわらず、学校教育の場においてデジタル教科書やタブレットの導入が議論もせずに進められています。エンターテインメントの分野にすらAIが使われ、音楽や映像作品が大量に「合成」されています。過去の名作であっても、粗悪な類似物が出回るようになると、その名作は価値を失うでしょう。

創造力とは何か。その意義を今一度問い直す時期にきているのかもしれない。